
瑠麵麩参点伍世

鰻はぢめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠麵麩参点伍世

【Nコード】

N8144I

【作者名】

鰻はぢめ

【あらすじ】

俺の兄貴は自称神且つ怪盗、その上二ト。
なのに何故だ！ 何故、神はこんな奴にカリスマ性なんて与えちま
つたんだ……！！

主人公小西幸人くんの哀れな日常を短編形式でお送りしております。

瑠鞠鮑参点伍世（るばんさんてんごせい）（前書き）

この小説は、私が文芸部時代に部活で書いたものを一部改訂したものです。

ゆえに多少の表現に拙い部分もあるの思いますが、銀河のような広い心で大目に見てやってください。

瑠鞠鮑参点伍世（るばんさんてんごせい）

昼間、ミンミンヴァンヴァン鳴き喚いていた蝉も、少しはおとなしくなる午後は10時。

俺、小西幸人はまったくクーラーの効いていない自分の部屋で、ヒイヒイ言いながら机に向かっていた。

……理由は聞かないでくれ。只、今日友達とプール行って飯食って帰ってきたのが今の今でたまたま今日この日というのが8月の31日という極めて特殊かつ特別で何にも代えがたい学生にとってはそうまあ端的に述べれば夏休みの最後の一日つまり最終日な感じの日だったのだ。…それだけだ。

「畜生。すべては仲原が悪い。そうだ仲原だ諸悪の根源は大体全部みんな仲原のせいだ。何かあつたら基本仲原が悪いんだ。畜生、3カ月くらい肩凝腰痛偏頭痛で悩めよこの野郎。」

俺が、元々吊り気味の目を更に歪ませ半ば自棄になりながらプリント上の文字と異文化コミュニケーションをしていると、いきなりガタガタと、窓のほうから音がしてきた。だがしかし。

俺は振り向かない。否、振り向けない。今はこの明らかなる地球外文字の解読をせねばならないのだ。

ガタガタガタ
「えー……取り敢えず訳解らん……ああ？　なんだこれは。」
ガタガタガタ

「コレなんてもう数学じゃねーだろ。英語だろ、英語。次元が何かもう別の世界だもんな。」

ガタガタガタ

「ああ、なるほど、感動の再開か！」

ガタガタガタ、

バン！

「あゝあ、開けてほしかったな。俺様この窓をと~~~~~つても開けてほしかったな〜!!」

俺は携帯を取り出した。取り出して、迷わずボタンをプッシュする。

「あーもしもし夜分遅くに申し訳ありません警察の方でしょうかk」

「のーーん!!」

バシ!!

携帯が何故か俺の手の中から弾き飛ばされた。振り返って見た何故か黒一色の正装をした奴の手の中にはワルサーP38（オモチャ）。奴は「ふっ。」と煙もクソも何も出てねえ銃口に息を吹きかけた後、ひらりと窓枠を乗り越えて俺の部屋に降り立った。

「つかこの部屋一軒家の二階なんだが。どうやって入った。それよ、靴はちゃんと脱げておかいさんに習わなかったのか。」

ちやちいエアガンを胸の前辺りしてくると回してから背広の下のホルスターに手を払うようにして戻した奴は、足を多きく開いて右手の人差し指を立てて天を指すという、間違った戦隊物の決めポーズのような格好をして、バツチリ俺を見た。微妙に完璧なのがムカつく。きつと昨日徹夜で練習したのだろう。

奴は、キラリと光る黒縁めがねを中指で軽く押し上げながら、ニヤリと笑った。

「やあ、愚民共。俺様の名は瑠麵麴参点伍世。華麗なる21世紀の怪盗さ。見た目も中身も超絶クールだぜ、惚れんなよ?」

「……………」

俺は家電の子機を取り出した。取り出して、迷わずボタンをプッシュする。

「あーもしもし夜分遅くに申し訳ありません警察の方でしょうかk」

「のーーん!!」

……………以下略。

「つか兄貴、いい加減怪盗ごっこすんの辞めろよ。いい年こいて

「はい、ママン　すぐいくよぉ〜!!」

痛い!!　痛すぎるよ!!!　ルックスは決して悪くはない、むしろ良いほうなのだが、こんなにも見ていて目が腐っていくような気分になるのはどうしてなんだろう。

「今に見てるよ、ゆっきー。俺様はでっかい男だから、なんかスゲーことやって、ぎゃふんと言わせてやる!!　IT企業とかな。」
捨て台詞にしか聞こえないような事を叫びつつも、兄貴は怪盗と発言してる割には普通に部屋を出ていった。

「っーかゆっきーって何だよ……。」

……アイツまさか、ファザゴン（おもひで）、マザゴン（げんざい）ときてブラコン（みらい?）になりそうなんじゃないだろうな?
ありえねーぞそんなの。ファミリーコンプレックスなんて聞いた事ねえよ。略したらゲーム機になっちまうじゃねえか。

「……ハッ、ありえね。」

俺は一つ、大きく息を吐くと、ふと時計に目をやった。

「は、え!?!」

短針が示すのは、紛れもなく「11」の文字。課題はほとんど目も通されていないような状況。

「……も、どうにでもしてくれ……。」

俺はプリントの山に顔を埋めた。

<了>

兄貴が構って欲しそうにこっちを見ている。 どうする？ 無視る。

あちい。朝からこんなにクソ熱いなんて異常だ。

残暑も何も、まだ夏が続いているとしか思えない。せつかくの土曜なのに、俺は耐えられなくなってベッドから飛び起きた。

畜生。余りの暑さに最近寝不足だ。何で俺の部屋にはエアコンがないんだ。兄貴の部屋にはあるのに。自称怪盗の自宅警備員の部屋にはエアコンがあつて、毎日必死で勉強している俺の部屋にないなんておかしい。……いや、多少誇張表現があつたな。そこまで勉強しているわけではない。しかし、兄弟間に差別があるのはよくない。まあ父さんも母さんもなんとなく兄貴容認派、っつーより過保護か！……何なんだこの家族は！ そろいもそろって某ゲーム機なのか！！？

あーなんかスゲー苛々してきた。腹いせと言っちゃあ何だが、兄貴叩き起こしてやろうか。

バタバタバタ、
バン！！

「起きやがれこの糞兄貴！！！」

……………！！

兄貴の部屋のドアを思いっきりブツ放した俺はフリーズした。

「……………なんだ、我が犬ゆっきーじゃないか。朝っぱらから煩い事この上ないね〜、死んでくれないかな、死んでくれないかな。ま、この世の俺様以外の人間はみ〜んな、生きてる価値も資格もね〜んだけど。グハハ。」

セリフには敢えて突っ込まない事にしよう。コイツ、頭逝っちゃってるから。カワイソーに。

「それより何の用だゆつきー？ ゆつきーのほうから俺様を訪ねてくるなんて珍しいじゃないか。遊んで欲しいのか？ え？ 遊んで欲しいのか？」

黙れ。息すんな。死ぬ。しかも微妙にうれしそうな顔をするな。キモい。つーかさつきから俺フリーズしたままじゃねーか。

取り敢えず、俺はもう一度兄貴を見る。兄貴は、散々散らかされた部屋の端に置いてあるこれまたどーしたらこーなると言いたくなるような状況のベッドに長い足を組んで座り華麗？ にモーニングテイーを飲んでいた。モーニングテイーに突っ込み心を掻き立てられた君。まだダメだ。こんなところで突っ込んでいてはならない。二トなめるなよ。今時の二トは部屋に電子ポットの1台や2台は普通に持つてるもんだ（偏見）。

「あーそーか、ゆつきーはモーニングテイーに来たんだな。ほら、俺様の隣に座りな、ゆつきーには特別に午前の紅茶を淹れてあげようじゃないか。本来なら君のような下々の者には与えないようにしているのだがな。」

「いや、いらねエよ。」

兄貴の淹れた茶なんて飲めるか。気色悪い。つーか飲んだら吐くだろうな。血を。そして死ぬ。後午後の紅茶みだいに言っつな。商標権を思いつきり侵害するのはやめろ。まあついでだから言っておくが、隣に座るのもゴメンだ。……俺は反抗期の父親に厳しい娘か何か。まあしかしこの兄貴だ。我侂言うのも見逃してやってくれ。グレてないだけ俺はまだ偉い方だと思う。

「……………え、あ、そ、そうだよな。ゆつきーみたいな愚民に、俺様のテイーの味なんて、分かるわけないよ、な。吊り目だしな。あ、はははは。あー、それにしてもこのお茶、うまいなあ。」

……飲ませたいのか？ 何故そこで構って欲しいオーラを出すのだ貴様は。そして吊り目は関係ないだろーが。まあ事実だが。事実ではあるのだが。

「うっ、ん、ホントにおいしいなあ。これを飲めないなんて、カ

ワイソーなゆつきー。ま、しょーがないよな。」

カワイソーなのはお前の頭だと思ってしまう俺を許してくれ。

「……ところで、何ですつと入り口で固まってるんだ、ゆつき？」
ああ、俺まだフリーズしてたのか。

「いや……別に……。」

俺は寝ていたときに着ていたジャージのポケットに両手をつっ込んだ。因みに、兄貴は昼夜構わず自称怪盗ルック……まあ、黒い細身のスーツに黒いYシャツという一見ホストみたいな服装なんだが。スーツの理由は「怪盗といえば正装」という思い込みかららしい。いったい何の刷り込みなんだか。とりあえず、それだ。兄貴といえは真つ黒の（自称）怪盗ルックな訳だ。普段は。そう、普段は。

「あ、兄貴……、怪盗のコスプレやめたのか……？」

今、兄貴が着ているのはどっからどう見ても某24時間営業のコンビニエンスストアの制服なのである。俺が物心ついた頃、既に兄貴は自称怪盗の自宅警備員だったため、物凄く果てしなく違和感がある。

「ダアーーーーーシュー!!!!!!」

「ぎゃあああああああああ!!!!!!」

何だコイツ、ポツカレモン目にかけてきやがった！なんて地味で痛い攻撃なんだ！！そして何故ベッドからドア前という超遠距離攻撃で目にピンポイントで入るんだよ!!!!!!

「テメエエ、何しやがんだバカヤロー!!!」

俺は叫んだ。我ながら良い声だと思われる。カラオケの点数も俺が家族で一番良かったりする。因みに、一番低いのは兄貴だ。兄貴はそれが悔しいらしく、時々家族でカラオケいこう等と突拍子もなく言い始めたりする。……おつとすまん、地味な痛みに一瞬現実逃避していた。

「何って、お前今俺の事バカにしたろーがああああ!!! 怪盗相手に「怪盗のコスプレやめたのか……？」とか完全に侮辱だ!!!!!!」

……あくまで怪盗と言い張るのか。じゃあこのコンビニの制服は……

…？ ま、まさかその系統のコンビニでバイトしてる気になるあの子の制服を怪盗してきちまったんじゃねえだろうなあ！！？

「あ、兄貴……、じゃあその某24時間営業のコンビニの制服は…
…？」

「あーこれか。これはなー、この系統のコンビニでバイトしてる気になるあの子」

俺は携帯を取り出した。取り出して、迷わずボタンをプッシュする。

「あーもしも朝早くに申し訳ありません警察の方でしょうk」

「のー！ーん！！」

以下略。

「まったくゆつきーはあゝ。人の話しは最後まで聞きましようって学校のとんでえに習わなかつたんでしゆかあゝ？ そんなんだからいつまでたつても冴えないガキのままなんだよー。」

いつまでたつても妄想乙な自宅警備員だけには言われたくない。

「……それで？ 何、気になるあの子と少しでもお近づきになるためにバイトはじめた、と？」

今までの話をざっと要約するところなる。下心の塊か、アンタは。

「人をそんな下心の塊みたいに言うなよ、ゆつきー。実はな、俺様神の集う掲示板でちよつと神友に怒られちゃってさあゝ。」

神友って何だよ。それよりまず兄貴と思考被つちまった。ヤバイ。

吐いてもいい？ すいません、取り敢えず血を吐いてもいいですか？

「神友曰くう、『社会の歯車になりたくないとか、働いたら負けとかニートは思ってるけどな、そうやって生きてくと親は自分の分まで社会の歯車になっていくんだぜ』『そろそろまじめに働けよ』『昼間っからネットしてて良い訳ねーだろ』『お前の本気は何時になったら出るんだ？』『……らしい。なるほど、一理あるなと思って、俺様も愚民共の生活を体験してみることにしたのさ。』」

……兄貴よ。それ、言ってる奴等も多分ニート（どうぞく）だと思

と。ん、中々重いな……。」

突然、全身に悪寒と寒気と動機息切れがやってきて、俺の意識は一気に浮上した。……物凄く目を開けちゃいけない気がする。体が何か暖かいものに包まれてるような気がするがきつと気のせいだ。全く持って気のせいだ。

「ふう、ゆつきーも大きくなったなあ……。」「ヒギッ

「ぎゃああああああああああああああああ！ さわんなあああああああ糞兄貴があああ！！！」

俺は兄貴の腕から3回転半で逃れた。……すげえ。全身に鳥肌立つことってあんだな。

「ひどいなー、ひどい、ひどいぞ、ゆつきー！！ 俺様に触られるなんて、愚民には考えられないような幸せなんだぞ！！！」

「お前に触られんだったらでかいカエルまみれになった方がマシだ！！！」

「そんな……！ 俺様怒ったぞ！ ゆつきーにはことごとく失望した！！！」

「……お前ごときに嫌われようが俺の生活に差し障りなんざねえんだよ。バイトなんだろ。もうどうでも良いから早く行けよ。」

「ゆつきーのバカヤロー！！！」

ふう、ようやく目の前からウザイ奴がいなくなった。安っぽい漫画とかなら、ここから俺が兄貴の大切さとか自覚していかなければならぬはずなんだが……残念ながら俺には生憎そいった趣味も、そうならなければならぬ要因もない。むしろ最近兄貴は俺に頼りすぎてるしちょうど良い機会だ。兄貴のほうに、俺断ちしてもらおうか。

玄關のほうからバタバタバタンと騒がしい物音がした。兄貴はどうやらそのままバイトに行くつもりらしい。

「ゆつきーのバカヤロー！！ 絶交だからな、謝っても許してやんないんだからなー！！！」

……ガキかアンタは。兄貴が俺に背を向けるとき言う言葉の大半はどう聞いても捨て台詞だ。

ボタン！

玄関のドアを大きな音を立てて閉めて、兄貴は出て行った。

「バーカ。」

玄関の方を向いて、鼻でフツと笑う。絶交なんてしたら辛いのは俺じゃなくてアンタの方だろ。なんたって某ゲーム機だしな。国内1、2を争うファミリコンプレックスだしな。要は家族大好きなんだろう。……さて、何日で陥落するかな。

「……幸君。」

「ああ、母さん。」

少し微笑んで見せる。もう本当、どうしようもないな、この家族は何で俺みたいなのができたのか不思議なくらいだ。

「俺は怒ってねえよ。」

「……そう、よかった。」

母さんは微笑んで、年に合わなくらい軽い足取りで階段を下りていった。

「……風呂はいる。」

俺はまだ納まらない鳥肌を、腕のうえから摩った。

<了>

何故ここに兄貴がいるのか俺には分からん。全くもって分からん。

「おっはよおおおおお!!!」
ドサッ

……朝の俺の機嫌は悪い。すこぶる悪い。テンションも低い。すこぶる低い。多分低血圧なのだろう。

だから、朝から超絶テンションで背中に飛び乗ってきたり、抱きついてきたりする輩がいると、殴り飛ばしたくなる。蹴り飛ばしたくなる。顔面に肘鉄を食らわせて、地中深く埋めて二度と目の前に現れない様にしたくなる。……かなり危ねえ奴だな、俺って。

だからと言おうか、仲原とか、こういう俺の性格を知ってるくせに絡んでくる鬱陶しい奴には、容赦ない鉄槌が必要なのだ。

「……死ぬ。」
「ぐぼお!!!」

後ろから抱き着いていた仲原の横っ腹に思いつきり肘を叩き込んで振り返りながら何が入ってるのかスカツスカな見た目とは裏腹に実際持つてみると驚くほど重いエナメルバッグと共に重力により地面に引き寄せられる体から伸びた奴の腕の肘辺りをつり掴んで体を引き寄せくると奴の懐に後ろ向きに入り込み空いていた方の手で肘を掴んだままの仲原の腕の手首を掴み立ち上がる反動に乗せて奴の体を俺の背中を持ち上げそのまま前へと腕に全体重をかける。

「うぎゃあああああああ!!!」
……一本背負い、と言っのだろうか。

仲原は、朝の昇降口で光を浴びながらもだえた。まるで芋虫だ、気持ちが悪い。

「おはよー小西……と、仲原。懲りねえなあ、お前。」
「おはよう、飛田。」

俺は爽やかに笑った。俺みたいな吊り目人種が笑うと狐目になるか

ら爽やかと言う表現があっているかどうかは謎な訳だが。

「小西テメー、対応が違うじゃねえか、対応があああ!!!」

「煩い。お前は世界で2番目にウザイ奴なんだから仕方ないだろうが。」

1番は……わざわざ言う必要もないだろう。奴は今日も昼から学校前のその系統のコンビニエンスストアーでバイトらしい。……本気で辞めてくれ。何故クビにならないんだ。兄貴は「バレたらもう怪盗ができないではないか!」とか意味不明なこと言って変装(一般的にはごく普通の服装である)しながらやっているらしいが。まあ俺としてもありがたい訳だが……。

仲原は無言で沈んでいる。体操座りをしながら床にのの字をいくつも書いていく。ガキかお前はと言いたくなるが、何故か似合っつまうのだ。高い身長割に顔が童顔だからなのかもしれない。こういう所があるから、ウザイと言っても俺はコイツを嫌いになれないのだ。あ、兄貴がやったらキモいぞ? 実際やってた事あるが。

「おら、教室行くぞ。さっさと立て。」

ゆるく背中を蹴ってやる。すると、仲原はすぐに立ち上がって、にっこりと笑い床で死んでいたエナメルバッグを拾い上げると肩に背負った。前々から思っていたのだが、仲原の笑顔は、犬みたいだ。ちよつと笑った顔に見えるパグ犬みたいな。……失礼? そんなの知らんがな。

「あはは、じゃ、行こうぜ。」

飛田が軽く笑って黒いショルダーバッグを揺らした。飛田は俺がひそかに尊敬する人だ。すべてを受け止めて、尚且つそれら全部に一番良いと思われる対処法をする。かと思ったらノリもいいし友達に一人は欲しいタイプだ。いや、一家に一人といっても過言ではない。「なあひだつちいゝ、一限目なに?」

「現国。」

「マジかー。だりいー。」

俺の高校生活は実に普通、実に平和。実によろしい。俺は幸せだ。

事件が起きたのは、昼休み。

四限終了のチャイムと同時に、教室の空気が一気に弛緩する。もともと張り詰めている訳ではないのだが。歓声を上げる奴までいる。

…仲原だが。

「仲原黙れー。じゃあ級長、号令。」

「きりーつ、礼、ありざしたー。」

「ざーっす。」

本人達は、いたって真面目に「ありがとうございます」と言っているつもりなのだ。勿論俺も。一応言っておく。

ちやちい机の横に引っ掛けてあるこげ茶のリユックサクを漁る。

ようやく昼飯だ。成長期だからか何なのかやたらと腹が減る。

「……あれ？」

かばんの中を引っ掻き回す。……ない。

「どーした、小西。べんとー忘れたのか？」

飛田は俺と席が隣だ。仲原は少し離れたところ。すげえいい距離。

今の席最高。

「おー、そうみたいだ。」

「じゃあ購買行くか。おい、仲原。」

俺たちが席を立とうとした時だった。

「あ、いた！ ゆっきいー！！」

……！！？

……何故いる！？ 何故ここにいる！！？

手を振るな、うれしそうに笑うな、大声でその恥ずかしいあだ名を叫ぶな！！！ 絶交中じゃなかったのか！！？

「もー、ゆっきーってばうっかりやさん。絶交中だけど俺様弁当持ってきてやったぞ。」

持つてこなくていいからああ!! 今すぐ帰ってくれえええ!!!
「ねえ、この人小西君のお兄さん?」

普段話さない女子……本山が声をかけてきた。その目には言わなくても解るまでに「興味津々ですが何か」と書かれている。そう見える。実際そうであるかどうかなんて関係ない。そう見えるのだからそうなのだ。

「んーまあ、そんな感じ。」

曖昧に返事を返す。うわ、教室の外かなり人集まってる。こりゃクラス中じゃすまねえな……。終わった……。

「小西のにーちゃんチヨーかけえじゃん!!」

仲原よ。それも言っられるのは今のうちだけだぞ?

「そうか? ……ありがとな。」

兄貴は照れたように笑った。……あれ? いつもとキャラ違つくねえか? 普段なら「H A H A H A H A ! 当然だ!! 俺様を誰だと思ってるんだ!!」くらい言いそうなものを。

「いい人じゃん! 小西と大違い!」

「ははは、ゆつきーはちよつとクールなところがあるからな。」

……こいつ! キャラ作ってやがる! ……否、普通こつちのほうが自然だし、普段のキャラが作られてたのか……? だつたらこいつは家族全員をだましていたという事か? そんなの無理だろ。コイツ某ゲーム機だし、否それもつくられて……ああもう、訳解らん!!!

「……小西君つて家でゆつきーて呼ばれてんの?」

今まで黙っていた本山が、ポツリとつぶやいた。

「……あ……。」

「……あ……。」

ハモったあああああああああああああああああああああああ
!!!!

やべえ、全身鳥肌再来した……。吐き気も来た……。ちょ、トイレトイレ……。

「小西？ どうした？」

飛田がいつの間にか俺の隣にいて、背中を摩ってくれた。それだけで一気に去り行く吐き気。すげえ、超いい奴飛田！ ……でも個人的にはこの場から離れたかったからトイレにでも逃げ込めたら良かったんだが。

「あーもうキャラつくんのしんどいからやめたあ〜！ まあ、ゆっきー。俺様高校なんて久々だからさ〜、案内しろよー。」

「キャラ作っとけよ！！ あーもう終わりだあああああああ！！ すべてが終わったあああああ！！ 兄貴なんかずっと部屋に籠もってたらよかつたんだよおお！！！」

もう俺のキャラが崩壊だよ！！！ 俺の平和な高校ライフがああああ！！！！

「俺様になんてこと言うんだゆkk」

「師匠になんてこと言うんだこにしいい！！！！！！」

ゴシユ！！

「ぎゃああああ！！ 何するですか仲原アアア！！」

「……お前、今俺様のこと師匠と呼んだか？」

「はい！ 師匠、俺を弟子にしてください！！」

何なんだこの訳解らん展開は！！ そして俺は無視か！！

「小西……ドンマイ。」

飛田が俺の肩をぼんぼんとたたいて言った。救われるような気がして振り返ってみたら、何故か奴の顔は超絶笑顔。……こいつ、ぜってえ楽しんでやがる。

「まあ、みんな一旦落ち着いて飯でも食おうぜ。小西のお兄さんも一緒にどうですか？」

飛田 テメEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE！！！！

「ああ、まあバイトまで時間あるし何処かで食っていくつもりだったから……いっしょに食ってやってもいいぞ？ ……でもゆっきーがなあ〜……俺様一応絶交中だったりするし？」

「……何が言いたい？」

た。……コレが洗脳か。恐ろしい。俺はガツクリと頂垂れた。

「……何かすまんかった。」

あ、いつの間にか謝っていた。まあいいか。これで丸く治まんだろ。「ゆつき……。」

「あんだよ。まだなんかあんのか？」

兄貴ははあ、と大げさに大きくため息を吐いた。ム力つくなこの野郎。しかもゆつきって何だよ。ゆつきーって言うの面倒臭くなったのか？ ただ一拍伸ばすのがしんどくなったのか？ まあそのまま幸人に戻してくれ。恥ずかしいから。

「そんな曖昧な謝罪で俺様が心開くと思ってるのか、ゆつきー！！

ここは一つ土下座で宜しくお願いしな
「死ぬ。」

容赦なく右頬をぶん殴った。普段鍛えてもない兄貴は驚くほどあっけなく吹っ飛んで、後ろに立っていた仲原の腕に収まって止まった。同じくらい身長あるのに兄貴と仲原のこの体格の差は何だ。仲原が鍛えている、じゃなくて兄貴が貧弱だ。流石もうすぐ二ートに逆戻り（俺はもうそのつもり）だ。

「な、殴ったね！ 親父にも殴られたこと無いのに！」

まあそりゃそうだな。親父超絶が付くほど過保護だし。前俺が兄貴殴ったら逆に俺殴られたし。何の格差だ。そして何故今更ハツとした顔をしてちよつとにやける？

「小西テメエエエ！！！」

ほお、中西がキレたらこんな顔すんだ。普段怒らねえ奴がキレたら怖いって言うが……あんま怖くねーな。拳振り上げて怖くねーなあれ？ 何だ殴ってこねーのかお前俺は別に殴られてもいいんだぞ痛くねーだろうしつか痛くできねーだろうし。逆にプルプルすんな。キモい。

「弟子1号！」

兄貴が短く叫ぶと、仲原がぴたりと止まった。微妙にうれしそうな顔すんなよ仲原。止められたかったのか。それとも殴りたくなかつ

たのか？ なら俺のランキング内ではランクアップな訳だが。

「お前ゆつきーの殴りたい感下げてんじゃねーよおお！！ 俺様「また殴ったね！」って言いたかったのによおお！！！」

版權んんんんんんんんんん！！ つーか今の発言前半だけだったら完全にDMじゃねえか！

「……奇遇ですね、師匠。俺もウケ狙って殴られようと思ったんすけど。なんかゆつきーノリ悪イしー。」

「お前までゆつきー言うなよ……殺すぞ？」

つーか俺を使ってウケを狙うな。お前ら二人でバカ漫才でもしてる。もう反対しねえから。取り敢えず俺の目の前から消えてくれ。

「きゃー、ゆつきーのDS〜！ 最低男〜！！ バーカ！ アホー！！」

「ぼけー！ 薄情者ー！！ 吊り目ー！ そんなんだから彼女できないんだー！」

「……黙れ。」

もう突っ込んでやるのもしんどいから。お前らのために殴るなんてバカらしい。殴った方の手も痛えんだぞ。後再度言うが吊り目は関係ねえだろうが。それに兄貴に彼女できないと言われる筋合いはない。

「はいはいそこまでー。」

飛田が笑いながら兄貴と仲原を止めた。

「面白いんだけどさ、そろそろ止めないと飯食う時間なくなっちゃうよ？ 小西がこんなに怒るのは珍しいのは分かんだけだな。」

飛田……。ランキング最高からかなりのランクダウンだ。こういうときは余裕を持って止めてくれるキャラだと思ってたんだがな。

「じゃあじゃあ、みんなで中庭で食べましょうよー。」

本山が兄貴の右腕を取る。左腕にはまた別の女子が。兄貴の何処が気に入るんだか訳解らん。何だ？ 兄貴一生に一度のモテ期なのか？

「両手に花とはこの事だな！ どーだゆつきー。羨ましいだろう！俺様くらいになると何処でもこうだがな！」

「羨ましいです、師匠!!」

全く信用してないが……もし何処でもそうだとしたら世の女性はいつたい何を見て生きてんだと言いたい。特に仲原には重々ねちねちと言募りたい。……外見か。外見なのか。まあ兄貴は見た目だけならそこらへんに転がってる奴等よりかはいいからな。でもいくらなんでもあの性格知つたらみんな逃げてくだろ……… いかないのか? 「否、早く飯食いに行こう………この際中庭でも何処でも良いからさ………」

俺いい加減腹減つてんだ。腹減つたら苛々する。苛々するとキレやすくなる。またどんな失態を犯すか解つたもんじゃないからな。つかこれ以上皆の笑いのネタにされる気は皆無だ。

「いやア、俺様移動すんの面倒いからここで食っちまおーぜ!」
「はあい!」

……何なんだこいつ等。ム力つくな。……まあいいけどさ。俺は俺の席にどっかりと腰を下ろした。そして兄貴から弁当包み引つたり、開こうとして、こっちをじっと見る目線に気付く。鬱陶しい。

「何だよ、兄貴。」

「いや………ここは自分の席はお兄様に譲るもんじゃないかなあ………なんて………」

はあ、俺は大きいため息を吐いて弁当を掴み席を立つた。

「あーそーですね、お・に・い・さ・ま。……それじゃ、精々久々の高校ライフを楽しむがいいさ。」

弁当包みを持っていない左手をひらりと振って、俺は教室を出た。

飯は誰もいないであろう屋上ででも食うか。

「ゆ、ゆっきー!」

後ろで兄貴が何か言っている。俺は振り返るのも面倒臭くて、また、左手をひらひら振ってやった。

「……俺、アンタと違ってつるむのもあんま好きじゃねえんだ。」
教室の喧騒と俺を呼ぶ兄貴の声は、だんだんと小さくなっていった。

<
J
>

ぼくのおにいちゃん くちみつと外伝

ぼくのおにいちゃん は ひとこと で いうと へんじん
です

まいにち くらい おなじ ふく を きているので ほんとうに
ちゃんと せんたくして いるのか あやしい ところ です
でも おとうさん や おかあさん は おにいちゃん は すば
らしい にんげん だから みならいなさい と いいます
よのなか は ぼく には りかい できない ようなことが
たくさん あるんだなあ と おもいました

おれの兄ちゃんは一言で表現するとヘンタイだ。

まず、服装がかなり怪しい。毎日黒いスーツで、しかもそれは「カ
イトウのセイソウ」というものらしい。意味わかんね。

でも、とーさんやかーさんはちがうらしくて、何か見習えとか言っ
てくる。いや、むりむりむり。おれまでヘンタイになっちゃっ
うじゃ
ん。

まったく、世の中にはおれにはわかんねー事ばっかだなあ。

俺の兄貴は実に端的に述べると変人且つ変態である。

先ずその容姿だ。何故か毎日黒一色のスーツ姿だ。どうにも解し難
い事に、それはホストでは無く怪盗の真似事であるらしい。毎日同
じ服であるし、洗濯していないとしても何ら不思議は無い。不潔だ。
しかし、父さんや母さんはそうは思っていないらしい。あまつさえ
見習えとまで言う。俺は内心どう対処したらいいのか何時も判断に
困る。

世の中には俺には理解できない事が多すぎてイライラする。

.....

「.....ゆつきー、なんだこれは！！ 年を追うごとに可憐らしさがカケラも無くなってくじゃないか！ あーあ、昔のお前はまだかわいかったんだぞー!？」

「否、昔から言ってる事大して変わってねーぞ.....?」

おわり！

ネオファイトFX最強は誰だ！ 王者決定戦！！ 確かにこれは戦いである

もうすぐ体育祭だとかいうやたらと暑く忙しい時期。試験もあるし正直周りで騒がれるのにうんざりしてくる時分だ。

しかし、俺の気分はうんざりどころか、清々しく晴々していた。

……兄貴が、バイトやめさせられた。

きゃっほほおおおいしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！

……おっとすまん、最近益々自分のキャラが保てなくなってきた。だがしかし、これは素晴らし過ぎる。嬉し過ぎる。かなり清々した。

理由は兄貴がバイトに行ったその系統のコンビ二で働いてた美人で中々有名だったらしいと言うか兄貴もその人目的でバイト始めたし理由になったつまりは事の原因なんだが……まあ、その人にだな、兄貴が猛アタックしまくった結果、彼氏持ちだったその人は兄貴と彼氏に板挟みにされてノイローゼ気味になっちまったらしい。いやあ、美しいっつーのは罪だね。じゃねえ。何してくれたんだ、兄貴。んでまあ、こりゃダメだってんで店長に解雇通知されたって訳だ。その女の人には申し訳ないが、俺としてはかなり有難かった。肩の力が一気に抜けた。兄貴のあの妙なカリスマ性も、ここじゃ通用しなかった訳だ！ 兄貴は落ち込んで1週間くらい引きこもってたが。ざまあみる。これで毎日学校でも兄貴と遭遇しなくてすむ。

俺はようやくやってきた休日に、平均睡眠時間0.5時間の穴を埋めるべく無駄な惰眠をむさぼっている。この数日はテンションが上がりすぎて夜通しK1のDVD見てみたり、徹夜で格ゲーしてみたり何故か大人買いしてしまった格闘漫画に意外と嵌って全部読んでしまったりと普段の俺からは想像もつかないような行動を多々取っ

てしまったために、かなりの絶対的で慢性的な睡眠不測に陥っていた。

だが、今は兄貴も落ち込みムード。俺の安眠を妨害する存在はまだまだ残っている気温の高さとか湿度の高さ以外は何もない。俺は、目は覚めたもののまだ眠いたためもう少し眠ろうとベットの途中で二つ寝返りをうつた。

バタバタバタ、
バン！

「ゆつきつき〜い！！ 久々あ〜！！」

「……………」

……………さつきの言葉一切を否定する。今日は最悪な一日だ。俺は額を抑えながらベットから抜け出した。こいつに絡まれるともう寝れる望みはない。

「ゆつきーテメエエ、一人徹夜で『ネオファイトFX最強は誰だ！王者決定戦！！』やってたんだって〜？ 俺様を誘えよ〜！！強いんだぞ、俺様最強なんだぞ！！ 特にガンシューティングとか！！ その証を見よ！！」

兄貴が誇らしげに腰のホルスターから取り出したるや、こちらも久々、ワルサーP38だ。何故この銃でなければいけないのかは皆目見当もつかないが、取り敢えず兄貴はこの銃を溺愛している。理由を聞いても「怪盗はこの銃じゃなければならぬんだ！ 理由？それが世界のルールだからさ！！」とか言う。訳解らん。

「ふーん。」

「ゆつきー！！ 今これをバカにしただろ！！ 死にさらせ！！」
返事返してやったのになんつう言い様だ。お前は会話してもらえただけ有難く思え。

「……………死ぬ。」

「うきやあああああああ！！ お前が死ぬ！！ ばーかばーか！！ この偉大なる銃の良さが分からないなんて、生きる資格すらない！！」

俺はドン引いた。

すばやく布団を回収し頭から被る。ダメだ。気持ち悪すぎる。何であんなのが俺の兄貴で家族なんだ。

「あ、ちょー！！ ゆっきー行こうよー！ ねー？ いいでしょゆっきー！！！！」

もうウザくても殴らない。だから早く出てってくれ。あ、寝れそう。マジ寝れそう、超寝れそう……。

「寝ちゃったの？ ゆっきー！ ゆっきゆっきゆっきゆっきいいいい！！！！！！」

「起きてよ 起きてよ …… ヤダーヤダヤダ ……！！！！」

俺様寂しくなったら死んじゃうぞ ……！！！！？」

「ママンもパパンも今日はいないんだって！！！！ このままじゃ俺様飢え死にしちゃう！！！！」

「ゆっきーのバカー！ 薄情者ー！ 吊り目ー！！ 死んじまえー！！ あ、やっぱ死んじやダメー！！！！」

「……ぐすん。いいもん。俺様ゆっきーが心開いてくれるまで毎日学校に合いに行つてやる。」

「それはやめろ！！！！」

学校でも会うなんて耐えれん。つーか事実耐えれなかった。

「あーなんだゆっきー、起きてたんじやないかー！ 狸だな？ 狸さんだったな？」

「当たり前だ！！ 寝れるわけないだろこのクソ兄貴が！！！！」

「あははは、相変わらずひどい口調だな。……次は無いと思えよ。取敢えずいくぞ、我が犬ゆっきー。」

はあ、行かなければならないのか。学校でまでコイツに会うよりかはマシか……？ 兄貴何故かセンサー達にまで気に入られて出入り自由になつちまったからな……。何故だ。何故こう俺の思う通りにいかない？

兄貴はぐきゃきゃきゃきゃなどと下品極まりない声で高笑いするとどこからともなくワルサーP38を取り出して、胸の前でクルクル

と回転させてから払う様にして腰のホルスターに入れた。いったいどこから出したんだんな物。俺はとっさにさっき俺がワルサーP38を思いっ切り故意に叩きつけた辺りを振り返ったがああ銃はどこにも見当たらなかった。

「立て、立つんだゆつきー！　そして俺様について来い！」

うぜえ。が、ここで無視して本当にこれ以上学校に来られても困る。つか俺に安息の地がなくなる。という訳で冗談抜きに鉛並みに重い体を引きずって俺は兄貴と共にせっかくの休日を一日無駄にしに外に出たのだった。

「ゆつきー、今日は神の車で外出するぞ。」

「……は？」

俺の思考は一瞬、事態の飲み込みを拒否した。当然だ。

「だーから神の車だって！　どんだけ耳悪いのもーゆつきーのおバカさん！　因みに名前は瑠麵麴号だ！！」

おれは薄っすら笑って兄貴の頬に手を伸ばす。兄貴がきよとんとしてから何故か顔をほころばす。指先が頬に触れたところで躊躇いも何もなく思いつきり肉を掴みドアノブを回すように左回りに擦じった。兄貴の顔が見る間に歪む。当然だ。

「いーたいたいたいたいたいいいいい！！　ゴメンゆつきーごめん！　マジでゴメン！」

おれは指を離してやった。兄貴は地面に崩れ落ち完全なる涙目で頬を抑えながらおーいたいとかが言っている。俺はその様を最近思いだせる中でも一番の冷めた瞳で見下ろす。当然だ。

「ゆつきー teme エエ、神に向かってこんな事して良いと思ってるのか！？」

「良いんじゃないの？　……行くんだったらこんな下らねえ事してねえで早く行こうぜ？　なあ、お兄様よ？」

「……、うん……。」

兄貴はがっくりと肩を落としながら家の裏手にあるもう使われていないガレージに向かって歩き出した。しかしそれも一瞬で、直ぐに何時も通りスタスタと胸を張ったような歩き方に戻った。基本的に都合のよい頭の作りをしているのだ。長い人差指でくるくる回すキーリングにはカギが10本程通っていて、ジャラジャラと音を立てている。

「ゆっきー、ちょっと待ってな。」

荒れ放題の庭の隅っこに埋もれる様に立っている罅割れたトタン屋根のガレージについた兄貴は、いくつもある鍵のなかからあつさりと一本を選び出し、ガレージのシャッターのカギ穴に押し込んで左側に回した。
がちやり。

あつさりとカギが開き、兄貴はシャッターをガラガラと音を立てながら押し上げる。段々と薄暗い中の様子が光に晒されて露わになってくる。

「……古ッ!!」

「古いとは何だ！ 失敬な!! これは初代マーチ、滅茶苦茶珍しいんだぞ!!?」

初代かよ……いったい何年前の代物だ？ 取り敢えず確実に俺はまだ生まれてねえ年代だろうな。…っつーかよくそんなモン手に入つたな。まあ、大方車オタクの軽井沢のじいさんに譲ってもらったんだろーが……あの人も兄貴溺愛してるし。

塗装し直したのだろうか、所々剥がれて赤が見えてはいるが車体は一応くすんだ黄色だ。何だ、マスタード色って言うのか？ とりあえず気色悪い。これ乗ってる所ダチに見られた暁には俺はいい笑い者だ。

「さあ、乗れ、ゆっきー！」

「……兄貴が運転すんのか……。」

不安だ。そもそもちゃんと免許持ってんのか？ 学校すらちゃんと

「だっしゅっー!!!」

「だっしゅっーじゃねえ!! ガレージの左側吹っ飛んだぞ!!!?
っーか左のミラーねえじゃねえか!!!」

「大丈夫だ!!! 右のミラーも無い!!!」

「何が大丈夫だ!!! 降ろせこのバカヤロオオオオオオオ!!!
!!!」

やっとの思いで車は私道に乗り出した。俺は人様の家につ込みやしないかと気が気ではない。もう降ろしてくれ!!! 俺が何をした! 「取り敢えず公道に出してしまえばこっちのもんだから!」

「余計危ないわ!!!」

時速20キロくらいでトロトロと進み、かと思ったらいきなり猛スピードで発進したり、凡人で常識人、一般人の俺には到底理解できないような運転法で、黄色(所々赤)の初代マーチが見慣れた近所の風景を歪ませながら進んでいく。っーかさつきから兄貴一切ギア触つてないんだが。どうやってこんな猛スピードが出たりするんだ……!!!?

……ハッ!

「兄貴イイイイイ! もしかしてこのボロ車、ギア壊れてんのか
!!!?」

「え!? そうなの!!!?」

「そうなのってお前ええええええ!!! 降ろせ! 今すぐ降ろせ
ええええええええ!!!」

「ダメ! ダメダメダメダメダメエエエエ!!!」

「何処の駄々っ子だ!!! 大体こんな運転でよく免許取れたな!」

「仕様がないだろ、車運転するの免許取って以来5年振りくらいな
んだから!!!」

……ハア!?

ちよっと待て、落ち着け、落ち着け俺。よく考えろ、よく考えるん

物凄いスピードで進んでいく。信号機のポールが曲がって見えるほどだ。兄貴は公道の制限速度を一体何キロだと思っっているんだ。

……信号機？　って今のが三番目じゃねえか！！

「ああああああああ！！　糞兄貴イイ、死んじまええええええええええええ！！！」

どーするつもりだ！！　つーか今更だがあの公園俺ん家から徒歩10分だぞ、車で行く意味ないじゃねえか！

「あれ？　信号越しちゃった!？」

「越しちゃった!？　じゃねえよ！　どーするつもりだ!」

「こーいう時は4番目でもいいから曲がっちゃうのだー!!」

「ちよ、兄貴それ高速の入り口……!!」

「え!?!　何ってゆつきー!?!　あ!?!　あああああああああああああああ!!」

ちよっと待て、俺。否、よく考えろ、俺。

さあ、ここで賢明な読者殿達にひとつ問題だ。家から徒歩10分のところにある公園に車で行ったら何分で着く?　……常識的に考えたらカッブラーメン作るくらいの時間で行けるはずだ。

では、なぜその程度の間で滅多なことでは動じないと評判の俺が見るからにグロッキーな状態になっているのか。

「……ごめんゆつき……。」

「……もう殴る気もしねえ……。」

……答えは40分だ。何で徒歩の4倍もかかるんだよ!!　なんかこの40分で3日分位の気力を使い果たした気分だ……。まああの車が幸いにもまだブレーキが生きてたことが唯一の救いだっただか。

「と、取り敢えず公園入ろう、な?　そうだ、ベンチあるから座ろう。まだ足元グラグラするか?」

「あー、否、大丈夫だ。大丈夫だから触れるな。」

俺は見るからにフラフラしながら公園に入った。その後ろに普段の

ウザいくらいの余裕など一切なくした兄貴がオロオロしながらついてくる。つーか兄貴は何でこんな所に……？ 誰かと持ち合わせでもしているのか。

「あ　！　るばんさまだー！！」

「ホントだ　！！」

俺達が公園に足を踏み入れるとほぼ同時に、幼い声上がる。子供だ。子供が……5人くらいで固まって何かを覗き込んでいたのが一斉にこちらに向かって走ってくる。走ってくる。走って……

「るばんさま　！！」

「ぐぼあー！！」

「ゆ、ゆつき　！！　こらー！　お前ら、ゆつきーは今とてつもなく車酔いの余韻が波のように襲ってきてる酷い状態なんだぞ！！　それに俺様はこつちだ、それはゆつきー！！」

兄貴は物凄い勢いで子供から俺を引き剥がすと、すぐ傍にあったベンチに俺を座らせ、自分は隣にどっかりと腰をおろした。

「ごめんなさい、るばんさま……」

「だってひさしぶりだったんだもん。」

「うん。」

「むー。るばんさまがあそんでくれないのがわるいんだもん。」

「るばんさまがいないとたいくつだもん。」

……なんだこれは。いったい何の状況だ。それより兄貴は一体何を目指しているんだ。

「そうだ、誰か飲み物を持っていないか？　ゆつきー、何か飲んだら楽になるだろ。」

「ぼくもってるよー！！」

「あたしももってるもん！」

「ゆんちゃんのアたらしいやつだよー。」

……子供が……。こないたいけな年頃の子供が……。何故兄貴が現れた時のウチのクラスの子（男も多少混ざってはいるが……仲原とか）のような反応を……？

「いや、別に大丈夫だ。それより子供から搾取するってどうなんだよ。」

「搾取……?」

「さくしゅー?」

皆一様にきよんとする。あー、そうか。そうだな。当事者にしたらこれは只の善意、または慕う心つてやつだろ? ……兄貴は知らんが。つーか搾取の意味を知っているのかどうかの方が怪しい。

「……ま、ゆつきーが言うなら大丈夫か。」

兄貴はふうと大きく息を吐いてベンチの背もたれに体を預けて前髪をかき上げる。子供は意気消沈したように肩を落とした。……そこまでなのか。

「いつ!?!」

突然足の甲に鋭い痛みが走る。……否、正直たかが子供と油断していた。かなり慣れてやがる。俺は俺の右足をぐりぐりこれでもかと踏みつける青い小さい靴を睨みつけた。それを辿った上にある顔が、にたりと笑う。……成程、そういうことか。いたいけな子供、という表現は間違っていたわけだ。俺はにたり、と笑い返した。ガキは一瞬びくりと顔をひきつらせる。

「ん……? どうした、ゆつきー?」

「いや、なんでもねえよ。なあ?」

青靴のガキにニッコリと笑いかける。右足の上の足はいつの間にか無くなっていった。

「只、俺心の狭い高校生だからさあ、ガキ相手でもイラついたら手出そつで怖いんだよね。」

「うぬ。ゆつきーの気の短さは無暗矢鱈と顔の怖い大型犬にも勝る所があるからな。」

ガキ共は俺からズルズルと後ずさり、兄貴の後ろに隠れた。

「コラ、ゆつきー。我が僕たちが怯えているではないか。」

兄貴が言つと、ガキ共は得意げな顔をしてこちらを見てくる。こんな不甲斐無い情けない大人に守られてここまで優越の笑みを浮かべ

る幼児に俺はこいつらの未来が心配にならないでもない。

多分こいつらの中では身分的に「俺<兄貴」の構図が成り立っているのだろう。まあ家や学校での不当な扱いは確かにその構図に基いてはいるが……。残念ながらこれには今この状況下において絶対的な欠点がある。

「あ？ 黙れ、この糞兄貴が。」

「ゆっきー酷い！ 俺様悪くないのに！！」

俺に対して影響を与えるような兄貴擁護の奴等（親、クラスメイト、近所のおばさん、その他多数）が周りにいないとき、俺等間の立場縮尺は「兄貴<俺」なのだ。否、常に立場的にはこの状況が続いているとも言ってもいいのだが、なにせ周りがな……。兄貴のこの訳の解らん吸引力リスマ体質はどうにかならないものなのか。

「るばんさまー！」

「むっー、ゆっきーのばかー！」

ガキ共はすかさず兄貴にフォローを入れる。っーかお前等までゆっきー言うな糞ガキ共が。

「こんなやつほっというてあそぼうよう。」

「るばんさまあそぼうー！」

「あそぼー。」

「……うん、そうだな、久々に遊んでやらん事もない。」

すると、ガキ共は弾けんばかりの笑顔をしてわいわいと兄貴の周りを飛び跳ねた。鬱陶しい事この上ない。俺はガキも嫌いだったか。最近自分の性格を掴み切れなくなってきた。取り敢えず、日に日に荒んできている気がするのは決して気のせいではない事だけは分かるのだが。

「……なら俺はここで寝てるから帰りに起こしてくれ。」

「え！？」

え！？ 何が！？

俺とガキ共は一斉に兄貴の方を見た。

「ダメダメダメ！ ゆっきーも一緒に遊ばないと連れてきた意味が

無いじゃないか！」

「え、いやお前荷物持ち云々言つてたじゃねえか！ それにいい年こいた高校生が何で幼児と楽しく遊ばにやならんのだ！」

「ぼくやだよ、ゆつきーこわいもん！」

「やだー！」

幼児＋俺（今だけ連合軍）に攻め立てられた兄貴は完全に拗ねて明後日の方向を抜いてルパン三世のテーマを口ずさみ始めた。勿論鼻歌だが。歌詞を知らんのだろう。

「るばんさまー。」

「あ、ぼくいえからおかしもつてくるね！」

「あー、あたしも！」

「またすぐくるね！」

ガキ共は口々に兄貴の背中に向かって喚き立てると一斉にどこかへ散らばって行ってしまった。……これは、俺に兄貴コレを何とかしろと言いたいのか。

「ねえ、ゆつきー。」

「……………なんだよ？」

「その間は何だ、その間は！ 俺様傷ついてるんだぞ！？」

だからどーした。それがどーした。なにがどーした。

「俺的にはそろそろストレスの捌け口が欲しかった所なんだよな……」

「……………」

「……………」

「……………」

俺と兄貴はそれきり黙り込んだ。

「ただいまあー！」

「るばんさまあー！！ おかしもつてきたよお、たべよあー！」

「おかあさんもきたよー！」

……………げ。親連れてきやがった。これはメンドクサー事になりそうだ。

否、まだ若いな。なら大丈夫か。

「こんにちは、明人君。」

「これはこれはどうも、お久方ぶりです。」

兄貴よ。最早深くは突っ込まないが、取り敢えず目上の人に挨拶するのにはベンチにそっくり返って足組んだ状態のままではやめてくれ。

「あら、そちらは？」

ちらり、と横眼だけで見られる。何なんだ、あの目は。……ああそ
うか、不味いな。奴等ガキのくせに告げ口してやがる。

「ああ、これはわが弟であり犬であるゆっきーだ！ ……何故か今日は何時にも増して機嫌が頗る悪い様だからあまり構わないでやってくれたまえ。」

……俺はもう突っ込まないぞ。さっき決めたからな。後、機嫌が悪いののはせつかくの休日だつてのに兄貴に散々連れ回されてるからだ。決して元々こんな気性な訳では……ないとは思うのだが。後、畜生どぶ以下に犬とか言われる言われはない。

「あら、弟さんなの。……余り似てないのね。」

こんなの似ててたまるか。生まれた時点で俺の人生終わっちゃうじゃねえか。

「るぱんさまこっちきてえ」

「ゲームもってきたからいっしょにやろー？」

「ああ、でも俺様はこれから移動の予定だから少しだけな。」

兄貴は俺の隣から立ち上がってガキ共のほうに歩いて行った。ガキの母親も俺にちらと一瞥くれてからそれに続く。……これから何か一つ仕掛けてくる懸念は捨てられない。が、このまま呆、とするのも時間の無駄だ。

………寝るか。

もう何もかもが面倒臭い。何かあっても何とかなるだろう。

俺はベンチにごろり、と横になった。

い。次はもつと遊んでもらえるわよ。」
「ちらり。」

……いや、今日兄貴が早く帰る事と俺はハッキリ言っただけ無関係だから。そんな含み笑いされても困ると言いますか。

俺は立ち上がり、くああ、とひとつ大きく欠伸をした。こんな事だつたら別に俺が態々睡眠時間削って兄貴について来る意味なかったんじゃないのか？ 俺はおおきく溜息を吐きだし、公園の外に向かって歩き出した。

「あ、コラ待てゆつきー！」

「るぱんさままっつてー！」

「まだたべてないおかしあるからあげるよー」

「これもっ！ これもあげるっー！」

ガキの目線に合わせて腰を屈めていた兄貴が早々に退場しようとしている俺を見とめて慌てて立ち上がると、本格的な別れを察したらしいガキ共がこれでもかと兄貴の腕の中に菓子類をバカバカ置いていく。

「ゆつきー！ こら！ 待てと言っているだろうが！ このタコ！」

「黙れ、自宅警備員の分際で。早くしねえと置いて帰るぞこの糞が。」

「あかーん！ あかんあかん〜！！ この俺様を置いて帰るとは何様やねん！」

……お前は何で急に関西弁なんだよ。

俺は呆れたように事実呆れながらポロ車の停めである場所まで歩いて行った。兄貴も急いで付いて来ようとするがガキのお菓子攻めはまだまだ終焉を迎えてはいないらしい。

辛子色の可哀想な感じの車が視界に入る。その時俺の中に過ったのが何故か嫌悪でも憐れみでも無く懐かしさであったことを特筆しておく。ポケットに突っ込んできた携帯で時間を確認すると、まだ家を出て3時間しか経っていなかった。40分は高速道路にて楽しい脳内お花畑の旅を満喫してきたから実際公園にいたのは2時間少々

と言った所だが、俺は寝ていたこともあって物凄く時間がたっていたような気がしていたのだ。……つつつても2時間でもかなりじゃねえか！！俺の貴重な時間があの糞兄貴に削られていく……！！
「ゆっきいいいいいいいいいい！！！」

兄貴が大声をあげながら両手に抱えた菓子類をポロポロ零しつつ俺の元へと駆けてくる。畜生、なんで妙に嬉しそうなんだよム力つく。後3メートル。2、1……

「よかったー、ゆっきーの薄情さって言ったらないからな、先に帰つちまつてへぶふお！！！」

「おおっとお、しまった、いつしゅんいしきがとんでおにいちゃんにむいしきのうちにらりあつとをかましっちゃったよ、てへっ。」

「何で棒読みなの！！？」

半泣きでラリアットかまされた瞬間に全て吹っ飛んだガキ共からの贈り物をわたたと拾い集める兄貴を尻目に、俺はあちこち錆だらけの初代マーチのボンネットにどっかり腰かけた。

「何でそこに座ってるんだ貴様はバカかああああ！！！」

「……否、地面よりかはマシかと思つて。」

「イタイイタイ鼻擦じるなつて！ごめん、バカつて嘘だから！

天才！ ゆっき 天才！ 凄い！！！」

あの後、さつさとしゃがれと兄貴をせかしてポロ車に乗り込み、次なる目的地に向かっている。相変わらず警察をバカにしているようなスピードでかつ飛ばしてはいるが、気分が悪くなるような揺れはなくなっていた。兄貴がと言うより、長い間放置されていた車の方が勘を取り戻したらしい。

「さて、これから向かうのは隣町の神友の屋敷だ！さて、愚民代表のゆっきーよ。くれぐれも粗相のないように頼むぞ。」

……神友隣町に居んのか。

「兄貴じゃねえから大丈夫だ。」

つーかさつきから見知ったような風景が流れているのだが。

「……なあ、兄貴よ。」

「なんだ、ゆつきー？」

だから俺が話し掛けるたび妙に嬉しそうな顔をするのをやめろ。本気で気持ち悪いから。

「ここ、さつきの暴走途中、迷走してた辺りじゃねえのか？」

「あ、ゆつきーも思ったか？ 実は俺様もなんだかあの家の窓はセコムのシールが貼ってあるなとか思っていたところだ。」

「……、……え、それがどうかしたのか？」

すまん、なんだか取り乱したようだ。否、耳の調子がおかしかった事にしておこう。兄貴と俺の意思の疎通が取れなくなる事なんてよくある事じゃないか。そんなことで一々反応してたら神経なんていくらあっても足らねえぞ。もともと少ねえのに（自覚あり）。

「……否、なんでもない。お、ついたぞ。」

ぎきききいいいいいいいいいい

恐ろしくなるほど不快な音を立て、黄色いボロ車は本当に急なブレーキに耐えて見せた。何だか俺、この車に同情に似た感情を持ち始めてきたぞ。

俺はボロ車から出て、先に神友とやらの家に向かった兄貴の後を追った。

「武田……か。」

スゲエ。

一言で言うとそのれだ。俺は生まれて初めてこんなスゲエ家を見た。いや、何となくでも生きとくもんだな。世の中には俺の知らない事がまだここにもあったのだ。

……… すっつげえボロい。もう黄色いマーチ何かむしる新品だよ。ピカピカですよ。

「武田殿！ 武田殿おおおおおおおおおおお！」

「叫ぶな！！ インターホンあるだろ、辛うじて！ それ押せ！！」
ぎぎいいいいい……

「る、瑠麵麩殿……か？ この武田今、今参上仕る……。」「
恐ろしい音を立てるドアの隙間から兄貴と同じくらいの年齢の男が
顔を覗かせ、引つ込めたと思ったたらまた酷い音をたて開き、長い前
髪に隠れた瞳がぴたり、俺とあった。

バタン！！ ガチャガチャ

「え！？ ちよつと武田殿！？ どーかされたか！」

「て、敵襲、敵襲だああああああ！！！」

俺は騎馬武者軍団か何かか。

「開けたまえ、開けたまえよ！ 武田殿、こ奴は私の配下の男に過
ぎない！！！」

……さつきから思ってたんだがこの変なテンションは何なんだ？
俺今まで日常に一度も聞いたことない単語を何度か聞いた気がする
のだが。

「なあ、兄貴。コイツもしかして」

……ガチート 本家自宅警備員か？ と口にする前に俺のセリフは兄貴のやた
らと長い指が生えた手によって塞がれた。

「口に気を付けよ、ゆつきー！ 高々農民の分際で軍神・武田殿に
そのような暴言を吐くなど狼藉も甚だしいぞ！」

「……ああ、そう言うノリなのか、気持ち悪いわ。死ぬ。後軍神は
武田じゃなくて上杉の方だろうが。アホか。」

「な……！！ ゆつきーテメエエエ！！」
がちゃり。

「瑠、麵麩殿。」

「ああ、武田殿。誠に失礼仕った、私の監督不行き届きが原因に候
……。ゆつきー、俺様は今から武田殿と戦法会議なのだ。お前はこ
れでそこら辺でジュースでも買ってなさい。」

兄貴は俺に百円玉を一枚コインと弾いてよこした。いるかよこんな

金汚らしい。つーかまずそれ以前にさ、

「……………なあ、別に俺いらねえじゃん。帰ってもいいか？」

「なっ！！ 駄目だ駄目だ！ 主人を置いて帰る部下がいたものか！！」

「否、俺設定としては農民なんだろう？ なんで会議に畑でエイコラやってる奴連れてくんだよ。ちゃんと武士連れて歩けよ。鍬で頭がち割るぞ。」

「ぐ……………っ！ し、仕方が無い。ゆっきー、ほら千円あげるからこのカフェでケーキセットでも買って待ってなさい。おいしいって有名だぞ。」

「おお、サンキュー兄貴。これでバス乗って帰れんな。」

「武田殿おおおおおお！！ ゆっきーも一緒にに入れてやってもいい！？ ダメ！！？ ダメなの！！！！？」

結局、俺はその後の戦法会議とやらにも半強制的に参加させられ部屋に入ると同時に恐ろしいほどの人格の変貌を遂げた武田殿とやらと互角の論戦を演じて見せた。若輩者のガキと舐めてかかることなけれ。そこら辺の大人より戦法と名のつく物には詳しいとの自負はある。……………まあ必然的に兄貴はハミる訳だが。仕方が有るまい。雰囲気のみで生きてやがるんだから。だから外観ほど汚くなかった室内の隅っこに体操座りしても誰も声をかけてはならないのだ。

「では、幸人殿、瑠麵麴殿、ご達者で。」

「ああ、武田殿、また掲示板にて会いましょうぞ。」

「……………ちゃんと働けよおまえら。」

ブギャギャギャギャブ□□□□□□□□□□

俺はこうしてこの無駄に長い1日を無事乗り切ったのだった。

つたく、俺の人生の邪魔をする奴なんざ残らず消滅すりゃいいのだ。

<了>

<おまけ>

小西家にて。

「ん……？ 兄貴、それなんだ？」

「ん？ でーえすのソフトー（新品）。」

「そんなに一杯どうしたんだ、いつの間に……。」

「さっき帰る時僕たちから貰った。」

「ふん……って、ダメだろーが！！ 今すぐ返しに行つて来い！……！」

<これでホントに了！>

あえてここでのキャラクター紹介（前書き）

まとめなくては私がこんがらがってしまふのですよ

あえてここでのキャラクター紹介

<主人公：小西幸人>

短気・切れ症・吊り目の三拍子そろった悲しいほど卑屈な高校2年生。

平和と平穩をこよなく愛すラノベの男主人公に超有り勝ちな設定を口の悪さと女の子からはあんまモテないといった点に於いてカバーしてやるうかと作者こと鰻に目論まれている何だか可哀想な奴。

<幸人の（どうしようもない）兄：小西明人／瑠麵麩三点伍世>

自分の事を怪盗であると同時に神であると信じ切っており、常に黒一色のスーツ姿（怪盗の以下略）を身に纏い、猛烈に他者を吸引するという妙なカリスマ性を随所で発揮する所謂N E E T。

神の車・瑠麵麩号という黄色に塗った初代マーチ（スクラップ寸前）を超絶運転、おそらく無免で乗り回している。

幸人の事を本人が嫌がっているにも関わらず執拗にゆっきーと呼び続け、「家族が大好き：ファミコン（ゲーム機ではない）」の称号を欲しい俛にし、他人に対しては常に上から目線な大変残念な大人である。

<幸人の父母>

兄である明人ばかり可愛がり幸人を蔑ろにするけしからん両親。

<小西家の親戚>

兄である明人ばかり可愛がり幸人を蔑ろにするけしからん親戚。

<ある系統のコンビ二でバイトしてる気になるあの子>

明人が片思いしていた相手。

この恋のおかげで明人は一瞬の自宅警備員卒業を果たしたが、気になるあの子本人は彼氏と明人の間に板挟みとなり、ノイローゼに陥ってしまったため明人はその系統のコンビニを解雇される結果に終わった。

因みに、そこは幸人が通っている高校のちょうど前にある「ゆめみ夢見画知高校前店」である。

< 幸人の友達 >

・ 仲原

名は勇氣というらしい。明人を師匠と崇め奉っている。

幸人にはウザがられているが本人は全く気にしていない。が、叩くと凹む。

・ 飛田

幸人の知りえる人間の中で最も「大人」である人物。故に一心にその尊敬の念を集めていたが、腹黒い一面が発覚、今では「要注意人物」指定されている。

< 近所の公園に集まるガキ >

明人に下僕呼ばわりされているのにも関わらず「るばんさま」と呼び大量の貢物をするある意味とても心配な子供。

明人に近づく者は子供特有の無邪気な残酷さで容赦なく排除しようとする。

彼らの母親も何故か明人の思う忖である。

< 神友 >

明人のweb上の友人。

全員が全員自分の事を何等かの神であると思い込んでいる。

「神の集う掲示板」等という怪しさ満点のBBSで日々愚民共の愚痴や、時々地球の将来について等を話し合っているらしい、どちらかと言うと危ない人たちである。

< 武田殿：軍神 >

明人の神友のうちの一人。

武田からしたら軍神は寧ろ敵うゑすまなのだが、そこには深く突っ込まないのが神の掟と神の定め（ざんねんなおとなへのきづかい）である。

明人の事を溜麵麩殿と呼び、幸人は幸人殿と呼ぶ。基本初対面の人とは話せない性格。

< その他諸々 >

明人の毒気に当てられてその気が無くても素晴らしい人物だと思いついて込んでしまう哀れな子羊たち。

主に近所のおばちゃん、夢見画知高校の面々等が当てられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8144i/>

溜麺麴参点伍世

2010年10月9日07時06分発行